琉球大学学術リポジトリ

中学生における「生きる力」の心理学的検討2 -C AMIにおける「努力」「他者の援助」と意味ある他者・進路発達の関係-

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2012-09-28
	キーワード (Ja): 生きる力, 意味ある他者, 進路発達
	キーワード (En): CAMI
	作成者: 島袋, 恒男, 千葉, 康成, Shimabukuro, Tsuneo,
	Chiba, Yasunari
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/25155

中学生における「生きる力」の心理学的検討Ⅱ

-CAMIにおける「努力」「他者の援助」と意味ある他者・進路発達の関係-

島袋恒男* 千葉康成**

A psychological study on "The zest of living" of a junior high school student II

— CAMI and significant others and career development —

Shimabukuro tsuneo* Chiba yasunari**

【要約】

本研究は、ニート率が高い沖縄県名護市の中学生における「生きる力」、「意味ある他者」、「キャリア発達」の関連を検討することを目的とする。研究仮説を「意味ある他者の支えを感じている子どもは、自ら行動し努力することができると認識し、それが学力にも良い影響を与え、望ましいキャリア発達をしている」とし、達成における手段一目的関係の理解を捉える CAMI 理論を中心に、2つの研究を実施し分析と考察を行った。研究目的1では、「意味ある他者」の調査結果を因子分析し、CAMI との関連を検討した。研究目的2では、CAMIとキャリア発達(CMAS4)との関連を検討した。CMAS4は「運の保有感」からは負の影響を受け、「努力と他者の援助の保有感」からは正の影響を受けていた。このことから、日頃「他者に支えられて努力できる」と認識している生徒は、キャリア発達も促されているといえる。「学力」へは、「関心度」が正の影響を与えていた。2つの研究から、努力し行動できると認識する生徒は、かかわりの強い他者の援助を受けながら、「生きる力」を育み、望ましい「キャリア発達」をしており、その結果「学力」をつけているといえ、研究仮説が概ね正しいことが確認された。

Key words: 生きる力, 意味ある他者, CAMI, 進路発達

I. 背景と目的

1. 中学生の生きる力と CAMI

千葉・島袋(2009)は、都市部、農村部における中学生の「努力」や「行動」の役割の理解や意識を、「学習」、「対人関係」、「進路」の3つの CAMI 測定尺度の因子分析を行いその3領域の関連性の特徴を因子分析を用いて検討した。その結果、「学習」においては第1因子に「運・能

力の保有感」がまとまり、次に「努力の保有感」が続いた。先行研究と同様に、勉強ができる、できないことの原因を「運」や「能力」という認識を土台として、成績・勉強に関する自己理解をしていることが説明できる。「対人関係」では友人の関係にしばった質問項目で、第1因子に「達成への統制感」、次に「教師の援助の保有感」が続いた。友人関係は、「その気になればうまくいく」と考えている生徒が多く、トラブルなどの際、う

^{*} 琉球大学教育学部 (University of the Ryukyus)

^{**} 沖縄県教育庁国頭教育事務所 (Kunigami Education Office)

まく取り持ってくれるのは教師であると感じてい る。「努力の保有感」は第5因子であり、生徒に とって友人関係は「努力」するものという考えは 薄いようだ。「進路」では第1因子に「達成への 統制感」と「運・能力の保有感」がまとまり、希 望進路の実現に関して、達成できるという統制感 は、運や能力によって支えられていると考えられ る。この3つの因子分析の際に算出した因子得点 を用いて、デモグラフィック要因などによる平均 値の比較を行うと,有意な差が出た変数は,「男女」 「将来の夢の有無 | 「卒業後の希望進路」「テレビ 視聴時間などの約束事」などによる差であった。 将来への見通しを持とうとしている生徒、生活習 慣を意識している生徒は.「努力の保有感」が比 較的高く,目標に向かって行動できる,「生きる力」 のある生徒ではないかと予測できた。

次に、これら3つのCAMIの因子得点をさらに2次的に因子分析し、「学習」「対人関係」「進路」に共通して潜んでいる因子を見つけようと試みた。その結果、3つの領域を通して第1に「運の保有感」がまとまり、第2に「達成への統制感と能力の保有感」がまとまった。このことから、中学生の根底には、うまくいくかどうかは「運」によって支えられており、「やればできる」という自信の根拠は「能力」があるからで、「頑張って努力したから」「他者に援助してもらっているから」という考えは比較的弱いことがわかった。

この2次的因子分析の因子得点と、「生きる力の自己評価」の4領域(能力・スキル、社会への適応力、態度・価値観、自己成長力)との相関関係を見ると、「運」との相関は弱く、「達成への統制感」「能力」「努力」「他者の援助」の保有感とはかなりの相関があった。CAMI測定尺度で生きる力の発達を予測することはできる結果であった。学力への影響を重回帰分析で調べると、「運」は負の影響を、「努力」「他者の援助」は正の影響を与えていた。さらに、1次的な因子分析の各因子得点で重回帰分析をすると、学習における「他者の援助」が正の影響を与え、学習における「運・能力」、対人における「教師の援助」と「能力」は、負の影響を与えていた。

まとめると、将来の夢を持ち、生活習慣への 意識が高く、家庭学習時間も比較的長い生徒ほ ど、「努力の保有感」が高く、生きる力へも学力 へも好影響を与えているが、「運の保有感」の高 い生徒は、生きる力へも学力へも好影響を与えて いない。換言すれば「運」「能力」のように統制 不可能な原因帰属による自己理解する生徒は、結 果だけ(うまくいったか、いかなかったか)を説 明をしようとしており、「努力」「他者の援助」の ように統制可能な原因帰属する生徒は、自分の達 成への行動過程(プロセス)を説明ができ、そし て実行に移している可能性を示している。つまり Bandura (1977) の指摘している自己効力感の有 無が生きる力の発達に寄与し、そして学力を生み だしていると予測できる。物事を成し遂げるとき. 結果に注目するのではなく、過程(プロセス)を 理解し説明できる生徒が、学力という結果を出し ているといえる。

結局、3つのCAMIは、「達成への統制感」「能力の保有感」「努力の保有感」「他者の援助の保有感」で「生きる力」と最もつながっていたといえ、CAMIにて「生きる力」を予測できるといえる。またそのような達成の過程の理解と実行に「他者の援助」の認識と意識が関わっていることをも示していた。

2. 意味ある他者 (significant others)

先に示したように生きる力を生みだす「学習」「進路」「対人関係」における達成への統制感や原因帰属を中心とする自己理解の key word は「努力」と「他者の援助」であった。この2つの key word が自己効力感を生み出していることが考えられるが、Bandura (1977) は自己効力感の形成に直接関与する条件として、「直接体験」はもとより「代理経験」(自分以外の他人が何かを達成したり成功したりすることを観察すること)や「言語的説得」(自分に能力があることを言語的に説明されること、言語的な励まし)など、他者との関わりの上で高められることがあると指摘している。「やればできる」という自信に他者のかかわりが影響しているといえる。

ところで、船津 (2000) によると、ミード (George.H.Mead) は人間の自我が他者とのかか

わりにおいて形成されると考える。自我が社会に先行して存在するという自我の孤立説に対して、社会は自我に先行して存在し、自我は社会から生まれると主張する。ミードによると、自我は「役割取得」(role taking)を通じて社会的に形づくられる。「役割取得」とは父母、兄弟姉妹、友達、先生などの「意味のある他者」(significant others)による期待を取り入れ、それによって自己の自我を形成することである。そのプロセスを具体的に明らかにすることがミード独自の社会的自我論の展開となっている。

島袋(2007)によると、子どもが自分の目標と 行動の「手段 - 目的関係」を理解し、行動を実行 に移すことができるようになるためには、進路場 面や学習場面において、「意味ある他者」との進 路指導や学習指導による方向付けと、同時にその 過程を支援していく対人関係が重要な要因になる という。

果たして,現在の中学生一人ひとりにどれだけ「意味ある他者」が存在し,かかわりがあると認識しているのだろうか。

3. キャリア教育

さて、先の研究で指摘したように「身近な教育問題」でとりあげた問題のうち、生徒の将来に関する「就職」「進学」などが多かった。学校現場では「キャリア教育」が実践されているが、具体的に何がどのように実践されているのだろうか。

キャリア教育に関する歴史などを三村(2006)を参考に記述する。

2003年5月、『平成15年版国民生活白書』(内閣府)は、フリーターを「15歳~34歳の若年(ただし、学生と主婦を除く)のうちパート・アルバイト(派遣等を含む)及び働く意志のある無職の人」と定義し、その数が2001年には417万人にのぼり、若年人口の5分の1を占めると発表した。年収100万円前後のフリーターと呼ばれる若者たちの拡大は世間に大きな衝撃を与えた。

また、『2004年版労働経済白書』(厚生労働省)では、通学も仕事もせず、就職のための職業訓練も受けてない、フリーターとは異なる若者をニート (NEET=Not in Educaion、Employment or Training) と呼び、その数は52万人と発表した。

さらに翌年版同白書では、64万人とその数が増加していることを示した。

こうした若年者の状況に対する具体的対策として、2003年6月に、文部科学大臣、厚生労働大臣、経済産業大臣、経済財政政策担当大臣の4大臣が「若者自立・挑戦プラン」を発表した。同プランは「若年者の働く意欲を喚起しつつ、全てのやる気のある若年者の職業的自立を促進し、もって若年失業者等の増加傾向を転換させること」を目標とし、具体的な政策の一つとして「教育段階から職場定着に至るキャリア形成及び就職支援」をあげ、「キャリア教育、職業体験等の推進」などをその具体策として示した。

2004年は、わが国のキャリア教育にとって記念すべき年であったという。その年の1月、文部科学省は『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書~児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために~』(以下『調査研究報告書』とする)を発行し、キャリア教育を「従来の教育の在り方を幅広く見直し、改革していくための理念と方向性を示す」とした。さらに、キャリア教育が単なるフリーターやニート対策ではなく、教育全体を見直す視点という役割を担い、教育改革を推進する働きをもつことを示した。また、「進路指導の取組は、キャリア教育の中核をなす」とし、キャリア教育と従来の進路指導の関係も整理した。

同年4月には「若者自立挑戦プラン」の一つとして示された「新キャリア教育プラン」が、文部科学省による「新キャリア教育プラン推進事業」として本格的に着手され、当初、全国45都道府県政令市、小学校110校、中学校86校、高等学校80校、合計276校がキャリア教育推進の指定を受けた。具体的には、実践協議会の開催、学習プログラムの開発および社会的体験の目的の明確化、地域と連携した組織的な展開を3年計画で研究することになった。

2005年、文部科学省はキャリア教育実践プロジェクトとして5日以上の職場体験を実施する「キャリア・スタート・ウィーク推進地域」を指導し、さらに一歩前進したキャリア教育強化策を講じることになった。すでに5日間の職場体験などを実施している兵庫県(「トライやるウィーク」

), 富山県(「『社会に学ぶ』14歳の挑戦」)を除いての実施であるが、初年度は138地域、約1000校の中学校が参加して「キャリア・スタート・ウィーク事業」が開始された。

文部科学省は、向こう3年をかけて全国のほぼ全ての公立中学校約10,000校に同事業を拡大する予定を立てた。この施策の特徴は、学校、PTA、各教育委員会、各労働局・ハローワーク、各経済産業局、地方公共団体、地域の経営者協会、商工会議所等を通した協議の場を設定すると同時に、関係諸機関等の連携・協力による職場体験等をはじめとするキャリア教育支援のシステム作りに重点を置いていることである。事業終了後も、システムが残ることで事業が継続されるとの長期的展望に立って行われている。

キャリア教育で育成が期待されている能力や態度は、2002年に国立教育政策研究所生徒指導研究センターが発表した『児童生徒の職業観・勤労観を育む学習プログラムの推進について(研究報告書)』にて、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)〜職業的(進路)発達にかかわる諸能力の育成の視点から〜」(以下「学習プログラムの枠組み(例)」とする)に示されている。ここでは、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4能力領域を、小、中、高の各学校段階で育成する能力・態度として提示している。

こうした能力や態度の育成が、ストレスから攻撃的な行動へ至る連鎖を断ち切り、エネルギーを破壊性から創造性へと転換する。具体的には、キャリア教育の4能力領域を次のように示すことができる。

まず、他者とうまく人間関係を構築していくこと(人間関係形成能力)は、問題性そのものの解決につながる。そして、正しく情報を収集し、活用する力(情報活用能力)は、誤った情報や、思い込みの情報に翻弄されるのを回避する。また、短期、長期に計画を立て、展望を持って行動する力(将来設計能力)は短絡的な行動を改める。そして「決めたら後ろを振り返らない」といった、意思決定の強さや、下した決定に対して責任を果たす力(意思決定能力)は創造性への原動力となる。

を積み重ねることが、創造性への移行メカニズムを促進するのである。と三村(2006)は述べている。「学習プログラムの枠組み(例)」のタイトルにある、育成が期待されている職業観・勤労観をどのようにとらえるかは、キャリア教育の実践に大きな影響をあたえる、という。とかくキャリア教育というと、仕事や資格について小学生から勉強させること、中学校や高校で職場体験やインターンシップを実施することと思い込んでいる人も多い。そこで、キャリア教育を正確に理解し、各

学校段階でどのように展開していくか。と三村

(2006) は問いかける。

このように 能力領域に示された各項目の育成

さらに三村(2006)は続ける。まず. 勤労観を「日 常生活の中での役割の理解や考え方と役割を果た そうとする態度、および役割を果たす意味やその 内容についての考え方」とする。つまり、勤労観 は日常生活における役割遂行への認識と態度、遂 行後形成された役割への意味づけとしての価値観 と考えるのである。たとえば、日常生活における 公園清掃を例に取り上げてみよう。児童生徒は地 域の公園を掃除するという役割があることを理解 し、それに対して何らかの考え方をもち、やって みようとする態度を形成する。そして社会的体験 として公園掃除を行い、その体験を通して公園清 掃の果たす意味や内容について価値観を形成する のである。自分が掃除して公園がきれいになれば 気持ちがいいだろうなという役割感をもち. 公園 清掃に取り組む態度が形成され、それに取り組む。 そして取り組み後、地域の人が豊かな気持ちで公 園での時間を送ることを実際に知り、公園清掃は 自分にとってどのような意味があるか考え、勤労 観へと位置づけていく。職業観は、そうした勤労 観の基盤に立った上での職業にかかわる、勤労観 と同様なプロセスを経た価値観なのである。

早い段階から職業について触れさせ、職業観を 形成する職場体験、インターンシップを実施する ことも大切だ。しかし、こうした活動も社会で自 分の果たす役割に対する基盤的な価値観としての 勤労観の育成がなされていて、初めて効果を発揮 する。勤労観は、家の手伝い、地域のボランティ ア、学校の係活動や清掃など、日常のあらゆる場 面を通して育成することができるのである。と三 村(2006)は述べている。その具体例について述べておきたい。

A中学校においては、「やんぱる夢発見プロジェクト」が平成17年度より実施されている。「やんぱる夢発見プロジェクト」は、地元の新しい産業である金融特区を意識して、経済・金融の知識をベースに職業観・勤労観を育むプログラムである。経済産業省『地域自立・民間活用型キャリア教育プロジェクト』に採択され平成17年度よりスタートした。

プログラムの目的は、実生活に即した活動や 職場体験、ライフプラン・キャリアシートの作 成などを通して、社会や経済の仕組みに関する 現実的理解を促進し、社会人・生活者としての 基本的な素養・能力及び将来設計能力を身に付 けるとともに、一人ひとりが職業観・勤労観を 育むことである。プログラムの内容は、以下の 通りである

a. 自己管理能力. 意思決定能力の醸成

たのしいゲームやわかりやすいワークシートを使用して、自分の生活・仕事とお金との関わりについて関心を持たせるとともに、その過程においてお小遣い帳をつけてお金の管理をし、合理的な選択ができるといった生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

b. コミュニケーション能力, 職業理解能力の醸成 名護市金融特区進出企業のコールセンターな どにおける職場体験や勤務者による講話を通し て, 仕事をする喜びや苦労を理解し働く意義を 見出すとともに, 社会や経済の仕組みに関する 現実的理解を促進する。

c. 将来設計能力,計画実行能力,プレゼンテーション能力の醸成.学習意欲の向上

ライフプラン・キャリアシートの作成を通して、夢の実現とお金との関わり、将来に必要なキャリアを考えさせ、学習への意欲向上を図るとともに、自分の考えや意見をまとめてわかりやすく発表するプレゼンテーション能力を身に付けさせる。

平成17年度A中学校では、2年生218名が将 来設計の仕方や仕事の大切さ、夢を実現するため にすべきことについて学んだ。具体的には「ライフプランニング」で将来設計とお金との関わりについて学び、体験学習としてはコールセンターのオペレーターの人たちによる電話対応などの実習、さらには名護市のマルチメディア館や宜野座村のサーバーファームを見学した。また自分の適性に合った仕事を理解した上で、将来の夢ややりたい仕事、中学校生活で身につけておくべき能力等について「キャリアシート」に書き込み、それをキャリアカウンセラーに添削してもらい、学習意欲の向上と生活態度の改善に繋げることができた。

4. 進路成熟態度尺度(CMAS-4)

キャリア発達を測る尺度はいくつかあるが、その中の一つに坂柳ら(1986)の「進路成熟態度尺度」がある。坂柳ら(1986)は、進路指導の目標の1つである進路発達・進路成熟の促進を図る前提として、進路成熟度を測定する尺度が必要であること、および進路指導研究を進めるうえでこの尺度が不可欠であることから、1981年より進路成熟態度尺度(Career Maturity Attitude Scale:略称 CMAS)の作成に取り組んできており、4度にわたる改訂を重ね、CMAS-4の信頼性と妥当性の最終的な検討を行っている。

この進路成熟態度尺度(CMAS-4)は,進学に対する進路成熟態度をみる「教育的進路成熟 (ECM)」と職業に対する進路成熟態度をみる「職業的進路成熟(OCM)」の2つの側面から構成されている。さらに各側面を3つの分野からみる。「進路自立度(CA)」と「進路計画度(CP)」と「進路関心度(CC)」の3つである。よって,2つの側面,3つの分野より,6つの下位尺度から構成されていることになる。

この CMAS-4 を用いた研究としては、廣瀬ら (1996) などがある。この研究では、沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟態度との関連を 明らかにしている。沖縄県の児童・生徒の進路成熟は、小学校から中学校、中学校から高等学校に かけて高まる方向にあるが、職業的進路計画度は その意味が発達段階や性の違いによって異なることが示された。さらに、進路成熟が高い者ほど、「将来の自分の進学も考慮に入れた上での職業選択」

なっているのに対し、進路成熟が低い者ほど、「現在の自分がすぐになれそうな職業」、または、「願望色の強い職業選択」となっていることが示唆された。

廣瀬ら(1997)では、男女別に将来の希望職種の変化を明らかにすることにより、沖縄県の児童・生徒の進路成熟の発達を検討している。全体的な結果としては、小学校段階から高等学校段階にかけて、あこがれによる職業選択から現実的な職業選択へと変化していくことが示された。進路成熟態度の変化という点からは、一般的進路関心度の高まりと、一般的進路依存度や一般的進路運志向・無関心度の低下という変化として認められた。さらに、男女の性差による違いについては、男子では小学校段階から高等学校段階にかけて徐々に進路成熟が進行するのに対して、女子では中学校段階が何らかの転換点となり中学校段階から高等学校段階にかけて急速に進路成熟が進行する可能性が示唆された。

この CMAS-4 の問題点として上げられるのが、3択の質問に対する回答に 0, 1, 2 のスコアをつけるのだが、そのスコア間の距離が、質問項目によっては異なるのでないかという疑問が持てるところである。もしも、距離が異なれば、分析に支障をきたすと思われる。

例えば.

- (ア) 進学のための勉強は、親や先生などに 言われないとできない・・・・0点
- (イ) 進学のための勉強は、できるだけ自分 でするつもりである・・・・・1 点
- (ウ) 進学のための勉強は、自分から進んで する・・・・・・・・・・2点

という質問項目があるが、この0点と、1点の間の「1」と1点と2点の間の「1」が、意味の大きさとして前者の「1」の方がかなり大きくないだろうか。さらに、別の質問項目の「1」との距離の差もあるだろう。

そこで、この問題点を改善するために、上の例であれば、

(ア) 進学のための勉強は、親や先生などに言 われないとできない

と質問し、その回答として以下の4つから選択 させてはどうか。 とてもそう思う(4)·そう思う(3)·すこしそう思う(2)·そう思わない(1)

こうすれば、すべての質問で回答の仕方が一致 し、その距離感の相異もかなり軽減されると思わ れる。今回の研究では、このように CMAS-4 を 修正して、調査に用いることにする。

5 研究目的

本研究では、先の3領域における達成への統制感と原因帰属に関する中学生の自己理解の特徴(努力と他者の援助の認識と保有感)が生きる力の発達に深く関係しているという結果に基づき、3つの領域における達成への統制感と原因帰属に関する自己理解(CAMI)と意味ある他者および進路発達との関係を検討する。そもそも「生きる力」にはどのような考え方や意識が影響しているのか、成長を支えてくれる「意味ある他者」をどれだけ感じているのか、これらの影響をどのように受けて「進路発達」をしているのか、これらのことを明らかにするために、本研究では、以下の目的で研究を進めていく。

- (1)「意味ある他者」と3つのCAMIにおける「手段の保有感と統制感」との関連を 明らかにする。
- (2) 3つの CAMI の「手段の保有感と統制感」 と、「進路発達」の関連を明らかにする。

さらに以上の背景と目的により、本研究では研 究仮説を、

意味ある他者の支えを感じている子どもは, 自ら行動し努力することができると認識し, それが学力にも良い影響を与え,望ましい 進路発達をしている。

とし,これを検証するために以下の計画で研究 を進めていく。

Ⅱ. 研究方法

[研究目的1] 「意味ある他者」と、名護市の都市部、農村部における中学生の「努力」や「行動」の役割の理解や意識との関連を検討する。

[方法] 調査対象者:中学校(都市部,農村部) 2年生160名

> 調査内容:学習,対人関係,進路 CAMI 測定尺度 60項目 4件法 (統制感4項目,手段の保有 感16項目の計20項目×3= 60項目)

> > 意味ある他者 18項目 4件法

調査時期:2008/02

[分析] 「意味ある他者」の因子分析から算出される因子得点と、3つの CAMI 尺度の2次的因子得点との関連を検討し(相関),「意味ある他者」と,「努力」や「行動」の役割の理解や意識との関連を検討する。

[研究目的2] 都市部、農村部における中学校の 「努力」や「行動」の役割の理解や意識 と「進路発達」との関連を検討する。

[方法] 調査対象者:中学校(都市部,農村部) 2年160名

> 調査内容:学習,対人関係,進路 CAMI 測定尺度 60項目 4件法 (統制感4項目,手段の保有 感16項目の計20項目×3= 60項目)

> > 進路成熟尺度(CMAS-4)を 4件法に直した修正版 30項 目 4件法

調査時期:2008/02

[分析] 3つの CAMI 尺度の因子得点と,「進路成熟態度尺度 (CMAS-4)」の各項目の平均得点との関連を検討し(相関),「努力」や「行動」の役割の理解や意識と「進路発達」との関連を検討する。

Ⅲ 結果と考察

1. 意味ある他者と3つの CAMI 測定尺度 の関係

1. 意味ある他者の因子分析

「意味ある他者」の尺度を因子分析した。主因

子法で、固有値1以上でバリマックス回転を行った。因子負荷量は、絶対値が0.40以上のものを採用した。その結果が表1である。全分散の51.24%で4因子が説明されている。後の分析で用いるため、因子得点を算出した。

第1因子は、固有値2.99(16.63%)の因子であり、 「お父さん(お母さん)の言うことなら、たいが いのことは素直に聞ける。|「先生の言うことなら、 たいがいのことは素直に聞ける。|「お父さん(お 母さん) は世の中で何が大事なことか話してくれ る。| 「先生から勉強のためになる話をいろいろと 聞くことができる。| 「先生は世の中のいろいろな できごとや人々の考え方などを話してくれる。| 「お父さん(お母さん)から、自分の将来のため になるいろいろな話が聞ける。」「お父さん(お母 さん) の男らしい(女らしい)振る舞いや行動を 見て、自分もそうなりたいと思うことがある。|「お 父さん(お母さん)に注意されたり、しかられた りすると身にしみてこたえる。」の8項目に高い 負荷を示している。自分に向かって盛んにかかわ ろうとしてくれる大人の存在感が感じられる項目 がまとまっている。「かかわりの強い大人の存在 感 | の因子であるといえる。

第2因子は、固有値 2.45 (13.63%) の因子であり、「将来の進学や職業のことについていろいろと話し合える友人がいる。」「友達は、困ったことを相談にのってくれ、いいアドバイスをしてくれる。」「友達の深い考えや視野の広さに感動することがよくある。」「たいがいのことなら素直に忠告を聞ける親友が私にはいる。」「よく友達と世の中のことや将来のことをいろいろと話し合っている。」の5項目に高い負荷を示している。これは、友人とのかかわりをあらわす項目がまとまっている。「かかわりの強い友人の存在感」の因子であるといえる。

第3因子は、固有値2.18(12.10%)の因子であり、「先生の男らしい(女らしい)振る舞いや行動を見て、自分もそうなりたいと思うことがある。」「お父さん(お母さん)に私はよく悩みを相談する。」「私はよく、先生にいろいろな悩み事や困ったことを相談している。」「お父さん(お母さん)の男らしい(女らしい)振る舞いや行動を見て、自分もそうなりたいと思うことがある。」の4項目に

表 1 意味ある他者の因子分析結果(バリマックス回転後の因子負荷量)

	因子1 【意・他1】 かかわりの 強い大人 の存在感	因子2 【意·他2】 かかわりの 強い友人 の存在感	因子3 【意・他3】 頼りやすい 大人の存 在感		共通性
お父さん(お母さん)の言うことなら、たいがいのこと は素直に聞ける。	.728	.110	.232	.055	.599
先生の言うことなら、たいがいのことは素直に聞ける。	.704	.107	.240	.069	.569
お父さん(お母さん)は世の中で何が大事なことか話 してくれる。	.595	.265	.347	.139	.564
先生から勉強のためになる話をいろいろと聞くことが できる。	.569	.227	.085	.282	.463
先生は世の中のいろいろなできごとや人々の考え方 などを話してくれる。	.502	.172	.284	.121	.377
お父さん(お母さん)から、自分の将来のためになる いろいろな話が聞ける。	.406	.092	.123	.149	.211
将来の進学や職業のことについていろいろと話し合 える友人がいる。	.127	.785	017	.141	.653
友達は、困ったことを相談にのってくれ、いいアドバ イスをしてくれる。	.056	.754	.067	.042	.578
友達の深い考えや視野の広さに感動することがよく ある。	.277	.649	.154	.113	.534
たいがいのことなら素直に忠告を聞ける親友が私に はいる。	.350	.584	035	150	.486
よく友達と世の中のことや将来のことをいろいろと話し 合っている。	006	.513	.392	.202	.458
先生の男らしい(女らしい)振る舞いや行動を見て、 自分もそうなりたいと思うことがある。	.292	.118	.725	.078	.631
お父さん(お母さん)に私はよく悩みを相談する。	.289	014	.580	.305	.514
私はよく、先生にいろいろな悩み事や困ったことを相 談している。	.290	.055	.567	.311	.506
お父さん(お母さん)の男らしい(女らしい)振る舞い や行動を見て、自分もそうなりたいと思うことがある。	.433	.129	.526	.017	.481
友達に注意されたり、おこられたりすると身にしみてこ たえる。	.114	.086	.064	.787	.644
先生に注意されたり、しかられたりすると身にしみてこ たえる。	.138	.130	.239	.542	.387
お父さん(お母さん)に注意されたり、しかられたりすると身にしみてこたえる。	.428	039	.372	.496	.569
固有値 分散の% 累積%	16.63	2.45 13.63 30.26	2.18 12.10 42.37	1.60 8.87 51.24	9.223

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴わないハリマックス法注) 因子負荷量は、絶対値が0.40以上のものを採用した。

高い負荷を示している。モデルとなる大人, 気軽 に相談できる大人, 「相談相手, モデルとしての 大人の存在感」, また, まとめれば「頼りやすい 大人の存在感」の因子であるともいえる。

第4因子は,固有値 1.60 (8.87%) の因子である。 この因子に負荷するのは,「友達に注意されたり, おこられたりすると身にしみてこたえる。」「先生に注意されたり、しかられたりすると身にしみてこたえる。」「お父さん(お母さん)に注意されたり、しかられたりすると身にしみてこたえる。」の3項目である。叱ってくれる友人、先生、親の項目が集まり、「叱ってくれる他者の存在感」の因子

であるといえる。

全体的に見て、まず第1因子には、相手から積極的にかかわってくれる親や先生がまとまり、親と先生で分かれなかった。意味ある他者としてからも意識されやすいのは、このように、向こうからいかわろうとしてくれる大人の存在であることがわかる。次に、親友の存在である。かかわりを受けるだけでなく、自分からも積極的にかかわわるをはいできる友人の存在である。同世代で最も身近に感じられる存在なのだろう。その次に、あこ近に感じられる存在なのだろう。その次に、あるこがれ、モデルとなるような、大人であっても相談したすい、近づきやすい、といった、頼りやすい、依存しやすい大人の存在である。最後には、自分に厳しく叱ってくれる、自分を戒めてくれる親、先生、友人の存在感があらわれた。

このように、中学生が「意味ある他者」と感じ

やすいのは、叱ってくれる他人よりも、積極的にかかわろうとしてくれる大人であり、親友であり、頼りやすい大人であることがわかる。昨今、人間関係の希薄化が叫ばれているが、まずは大人の側から子どもたちにかかわろうとしてあげることが大切であることを示している。

2. 意味ある他者の因子得点の比較(デモグラフィック要因ほか)

上の因子分析で算出した因子得点を用いて,デモグラフィック要因ほか,生活の実態などによる差を検討してみる。なお,有意差が認められた項目のみ掲載する。載っていない項目は,有意な差が見られなかった。

まずは、デモグラフィック要因ごとに分析結果 を載せ、その後に各因子ごとに考察する。

表 2 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (学校所在地): t 検定

	都市or農村	N	平均値	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	都市部	76	0414149	.92289567	n.s.
大人の存在感	農村部	43	.073 1985	.79674992	
【意・他2】かかわりの強い	都市部	76	.1034242	.96190642	†
友人の存在感	農村部	43	1827963	.78499374	
【意・他3】相談相手、モデ	都市部	76	0453817	.82991822	n.s.
ルとしての大人の存在感	農村部	43	.0802095	.87933375	
【意・他4】叱ってくれる他	都市部	76	0568267	.88486795	n.s.
者の存在感	農村部	43	.1004379	.80092046	

学校所在地(都市 or 農村)には、因子2「かかわりの強い友人の存在感」のみ1%水準で有意差が見られた。都市部と農村部の違いには、在籍数の違いがあり、この調査をした学校では、都市部は農村部の約2倍であり、農村部は、通学区域

が広く、小さな小学校の卒業生の寄せ集めである。 つまり、農村部の中学生は都市部に比べて、交友 関係が閉鎖的であり、その差が、数値にあらわれ たと考えられる。

表 3 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (男女別): t 検定

	性別	N	平均値	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	男	59	.2269553	.83973210	**
大人の存在感	女	60	2231727	.86334922	
【意・他2】かかわりの強い	男	59	3622754	.74629793	***
友人の存在感	女	60	.3562375	.91932370	
【意・他3】相談相手、モデ	男	59	.2480025	.92300131	**
ルとしての大人の存在感	女	60	2438691	.68836447	
【意・他4】叱ってくれる他	男	59	0341694	.87764830	n.s.
者の存在感	女	60	.0335999	.83902036	

男女別では、3因子で有意差が見られた。男子が高いのは、因子1「かかわりの強い大人の存在感」、因子3「頼りやすい大人の存在感」で、女子が高いのは、「かかわりの強い友人の存在感」だった。有意差はなかったが、因子4「叱ってく

れる他者の存在感 | も女子が高かった。

このことから、男子は、友人というヨコのつながりよりも、大人というタテのつながりをより意識しており、女子はその逆であることがわかる。

表 4	意味ある他者因子得点	平均値の比較	(父親との生活)	: + 檢定
12 4	忌外のる他有凶」所忌	プラ 巨マノレロギス		· 1700

	1【父親との生活】現在	N	平均値	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い 大人の存在感	いる いない	88 18	.0571419 3849374	.81876868 1.02904351	*
【意・他2】かかわりの強い 友人の存在感	いる	88	0183589	.91191248	n.s.
【意・他3】相談相手、モデ	いない	18 88	.0080192 0438000	.95770937 .85288456	n.s.
ルとしての大人の存在感	いない	18	.3101949	.90650799	
【意・他4】叱ってくれる他 者の存在感	いる いない	88 18	.0539330 1063943	.84216910 .95644541	n.s.

父親と同居して生活しているかどうかで分析すると,因子1「かかわりの強い大人の存在感」のみが5%水準で有意な差が見られた。父親と一緒に生活している中学生の方が,かかわりの強い大

人をより意識していることがわかる。父親不在の 中学生は、大きなマイナス値を示し、自分にかか わってくれる大人の存在感がかなり弱いといえ る。

表 5 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (母親との生活): t 検定

	1【母親との生活】現在	Z	平均値	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	いる	103	0114614	.87469680	n.s.
大人の存在感	いない	3	.051 2534	1.15711323	
【意・他2】かかわりの強い	いる	103	0172109	.92508654	n.s.
友人の存在感	いない	3	.3474893	.63166398	
【意・他3】相談相手、モデ	いる	103	0216186	.84412116	*
ルとしての大人の存在感	いない	3	1.1906355	1.17316905	
【意・他4】叱ってくれる他	いる	103	.0335528	.87279020	n.s.
者の存在感	いない	3	6338425	.72825100	

母親と一緒に生活しているかどうかで比較する と、因子3「頼りやすい大人の存在感」のみ5% 水準で有意な差が見られた。母親不在の家庭はご くわずかだが、その中学生は、頼りやすい大人の存在感が高く、母以外の頼れる大人を探し求めて、すでに見つけている状態といえるのではないか。

表 6 意味ある他者因子得点 平均値の比較(部活動の参加): F検定

		度数	平均値	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	運動部にだけ参加	77	.1402419	.80809892	**
大人の存在感	文化部にだけ参加	16	3242450	.90893009	
	運動部と文化部の両 方に参加	5	.7308090	1.28333564	
	運動部、文化部のどち らにも参加していない	20	3891613	.76784952	
	合計	118	.0125553	.87064915	

【意・他2】かかわりの強い	運動部にだけ参加	77	0359134	.88330556	n.s.
友人の存在感	文化部にだけ参加	16	.0278781	.905 50259	
	運動部と文化部の両 方に参加	5	6529141	.86413261	
	運動部、文化部のどち らにも参加していない	20	.3186871	.97451495	
	合計	118	.0066940	.91004080	
【意・他3】相談相手、モデ	運動部にだけ参加	77	.0851575	.88239169	n.s.
┃ ルとしての大人の存在感	文化部にだけ参加	16	2359397	.76721795	
	運動部と文化部の両 方に参加	5	.0531270	1.13987847	
	運動部、文化部のどち らにも参加していない	20	1738775	.69251893	
	合計	118	0036426	.849 23163	
【意・他4】叱ってくれる他	運動部にだけ参加	77	0832463	.80847978	n.s.
者の存在感	文化部にだけ参加	16	.233 2468	1.01075635	
	運動部と文化部の両 方に参加	5	.3657332	.86432383	
	運動部、文化部のどち らにも参加していない	20	.0896978	.89531271	
	合計	118	.0080051	.85457839	

部活動への参加状況で比較すると、「運動部と い数値になっている。いろいろとかかわってくれ 文化部の両方に参加」している中学生の、因子 1 る大人が特別に存在するからこそ、両立できてい 「かかわりの強い大人の存在感」がずば抜けて高るともいえるのではないだろうか。

表 7 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (家での勉強時間): F検定

		度数	平均值	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	全くしない	15	6914863	.74888561	*
大人の存在感	30分より少ない	32	1112896	.69757945	
	30分以上、1時間より少ない	35	.1655247	1.07095970	
	1時間以上、2時間より少ない	30	.2140833	.72631347	
	2時間以上、3時間より少ない	6	.2018042	.80840746	
	合計	119	.00000000	.87770415	
【意・他2】かかわりの強い	全くしない	15	1084258	1.20244506	n.s.
友人の存在感	30分より少ない	32	0496752	.93648794	
	30分以上、1時間より少ない	35	0957630	.91403403	
	1時間以上、2時間より少ない	30	.2203288	.78531886	
	2時間以上、3時間より少ない	6	.1045253	.50185210	
	合計	119	.0000000	.90911392	
【意・他3】相談相手、モデ	全くしない	15	.2435713	.94375428	n.s.
ルとしての大人の存在感	30分より少ない	32	0961040	.87676425	
	30分以上、1時間より少ない	35	1319112	.83446408	
	1時間以上、2時間より少ない	30	.1826316	.80811561	
	2時間以上、3時間より少ない	6	2219835	.71417670	
	合計	119	.00000000	.84655860	
【意・他4】叱ってくれる他	全くしない	15	0466146	.96509569	n.s.
者の存在感	30分より少ない	32	.0624363	.91607994	1
	30分以上、1時間より少ない	35	.0258277	.82277619	
	1時間以上、2時間より少ない	30	0601971	.89392785	
	2時間以上、3時間より少ない	6	0310409	.38990917	
	合計	119	.0000000	.85541860	

家庭での勉強時間で比較すると,時間が増える ほど,因子1「かかわりの強い大人の存在感」が 高くなっている。かかわってくれる大人がいるか ら,勉強時間が増えていて,かかわってくれる大 人がいないため、勉強しないともいえる。家庭で の学習を定着させるためには、やはり「大人のか かわり」が不可欠だといえそうだ。

表 8 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (家での読書時間): F検定

		度数	平均值	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	全くしない	33	21 78241	.71331135	*
大人の存在感	10分より少ない	20	.6109020	.95762608	
	10分以上、30分より少ない	34	0804190	.88432535	
	30分以上、1時間より少ない	25	0812334	.90574064	
	1時間以上、2時間より少な い	5	0187920	.47812314	
	2時間以上	2	0854028	1.16441791	
	合計	119	.0000000	.87770415	
【意・他2】かかわりの強い	全くしない	33	.1439577	.89849777	n.s.
友人の存在感	10分より少ない	20	.0963371	.87275855	
	10分以上、30分より少ない	34	1614153	.89949761	
	30分以上、1時間より少ない	25	0902506	.90595113	
	1時間以上、2時間より少な い	5	.2386471	1.33284827	
	2時間以上	2	0630980	1.20989403	
	合計	119	.0000000	.90911392	
【意・他3】相談相手、モデ	全くしない	33	.2263191	.95307884	n.s.
ルとしての大人の存在感	10分より少ない	20	.2865692	.99530204	
	10分以上、30分より少ない	34	1986886	.72909726	
	30分以上、1時間より少ない	25	1735994	.68079090	
	1時間以上、2時間より少な い	5	3914108	.65557750	
	2時間以上	2	0737311	.29433485	
	合計	119	.0000000	.84655860	
【意・他4】叱ってくれる他	全くしない	33	.2406104	.77015904	n.s.
者の存在感	10分より少ない	20	.0641508	.95357587	
	10分以上、30分より少ない	34	1282920	.78788579	
	30分以上、1時間より少ない	25	1146307	.97507130	
	1時間以上、2時間より少な い	5	0688791	.78406707	
	2時間以上	2	8255337	.24030095	
	合計	119	.0000000	.85541860	

読書時間で比較すると、因子1「かかわりの強い大人の存在感」のみ5%水準で有意な差が見られた。「10分より少ない」と答えた中学生の平均値がずば抜けて高い。「ちょこっとは読んではい

る」と答える生徒へ、かかわっている大人が強く 認識されていることになる。かかわってくれる大 人がいるから、ちょっとは読む努力をしていると いうことになろうか。

表 9 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (将来の夢): F検定

		度数	平均值	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	持っている	42	.201 2242	.99101932	†
大人の存在感 	どちらかといえ ば、持っている	30	.009 9260	.91292596	
	どちらかといえ ば、持っていない	36	0638221	.701 04034	
	持っていない	11	5865092	.602 60989	
	合計	119	.0000000	.87770415	

i			1		
【意・他2】かかわりの強い	持っている	42	.0177109	.71639106	n.s.
│ 友人の存在感 │	どちらかといえ ば、持っている	30	.051 5959	.845 52661	
	どちらかといえ ば、持っていない	36	.045 1786	.99508292	
	持っていない	11	3561967	1.39758315	
	合計	119	.0000000	.90911392	
【意・他3】頼りやすい大人	持っている	42	.0670014	.96468017	n.s.
の存在感 	どちらかといえ ば、持っている	30	.1068809	.781 66573	
	どちらかといえ ば、持っていない	36	0425828	.848 76962	
	持っていない	11	4079551	.32411680	
	合計	119	.0000000	.846 55860	
【意・他4】叱ってくれる他	持っている	42	.0240462	.858 95896	n.s.
者の存在感 	どちらかといえ ば、持っている	30	1577153	.73083682	
	どちらかといえ ば、持っていない	36	.1644436	.89686727	
	持っていない	11	1998591	1.01337477	
	合計	119	.0000000	.85541860	

将来の夢の有無で比較すると,因子1「かかわりの強い大人の存在感」でのみ,10%水準で有意差がある。夢を持っていない中学生は,かかわり

の強い大人の存在感がとても低い。夢をもたせる 意味でも、大人のかかわりが重要であることを示 す結果となった。

表 10 意味ある他者因子得点 平均値の比較 (卒業後の希望進路): F検定

		度数	平均値	標準偏差	確率
【意・他1】かかわりの強い	普通科高校	76	0306706	.85066696	
大人の存在感	実業高校	36	0965531	.87246840	
	専門学校	6	.8341980	.97604123	
	合計	119	.0000000	.87770415	
【意・他2】かかわりの強い	普通科高校	76	0217343	.96134025	
友人の存在感	実業髙校	36	.0592315	.85968765	
	専門学校	6	2270535	.46822609	
	合計	119	.0000000	.90911392	
【意・他3】頼りやすい大人	普通科高校	76	1317539	.77122097	
の存在感	実業髙校	36	.1966679	.90068041	
	専門学校	6	.1430429	.94068480	
	合計	119	.0000000	.84655860	
【意・他4】叱ってくれる他	普通科高校	76	.1022301	.83295998	
者の存在感	実業高校	36	2734773	.84609899	
	専門学校	6	.1800145	.95712763	
	合計	119	.0000000	.85541860	

卒業後の希望進路においては,因子2以外は有意差があらわれた。因子1では「就職」「専門学校」の生徒が高い数値を示し,因子3では,「就職」の生徒が極端に高い数値で,因子4でも同様

な結果となった。専門学校希望者は「かかわりの 強い大人の存在感」を強く感じており、実業高校 希望者には「叱ってくれる大人」はあまりいない ようだが、「叱ってくれる大人の存在感」は高く、 普通科希望者は「頼りやすい大人の存在感」が低 くなっている。

次に、意味ある他者の各因子ごとに、有意差の 認められた要因についてまとめておきたい。

因子1「かかわりの強い大人の存在感」に影響しているのは、「男女」「部活動」「父との同居」「家での勉強時間」「読書時間」「将来の夢の有無」「卒業後の希望進路」である。この因子1で、有意差があった項目が最も多かった。大人にかかわってもらっていると認識している生徒たちは、比較的望ましい方向で努力しているといえるだろう。

次に因子2「かかわりの強い友人の存在感」である。有意差が見られたのは、「都市 or 農村」「男女」の2項目のみだ。都市部の方が高く、女子の方が高いという結果だ。逆にいえば、友人とのかかわりは、こうした調査項目(日常の生活や、個の考え方など)からの影響は受けにくいともいえる。

次に,因子3「頼りやすい大人の存在感」だが,有意差が見られたのは「男女」「母親との同居」「卒業後の希望進路」の3項目である。依存の対象として大人の存在を認めるのは,男性と母なき生徒と就職希望の生徒ということになる。

最後に、因子4「叱ってくれる他者の存在感」では、有意差があらわれたのは「卒業後の希望進路」のみであった。「実業高校」を目指している 生徒のみマイナス値を示している。

3. 意味ある他者の因子得点と CAMI-Total 因 子得点の関係

3.1. 相関関係

次の表 11 は、意味ある他者因子得点と CAMI-Total 因子得点の相関関係を調べた結果である。 この調査対象は、 2 学年生徒の約半数 119 名のみ である。

CAMI_Totall「運の保有感」は、「頼りやすい大人の存在感」r=.352(p<.001)と、「叱ってくれる他者の存在感」r=.262(p<.01)と相関があるが低い。運まかせだけに、かかわりの強い関係は意識せずに聞き流し、困ったときのみ、「頼る」といった、他力本願の考え方が見える。

CAMI_Total2「達成への統制感」と「能力の保有感」は、「かかわりの強い大人の存在感」r=.357(p<.001)と相関があるが低く、「頼りやすい大人の存在感」r=.518(p<.001)と、かなり相関がある。この結果から、かかわりの強い大人へのありがたさを感じつつ、それが「やればできる」という自信につながっているが、困ったときに相談できる、頼れる大人がいないと不安といったような考えが見える。

次に、CAMI_Total3「努力の保有感」と「他者の援助の保有感」だが、「かかわりの強い大人

表 11	音味ある	、他老田子得占	٠ ٢	CAMI-Total 因子得占の相関

		CAMI_total_ 1VM「運 の保有感」	CAMI_total_2V M「達成への 統制感」と「能 力の保有感」	CAMI_total_3V M「努力の保 有感」と「他者 の援助の保 有感」
【意・他1】かかわりの強い	Pearson の相関係数	.056	.357**	.454**
大人の存在感	有意確率(両側)	.542	.000	.000
	N	119	119	119
【意・他2】かかわりの強い	Pearson の相関係数	020	.018	.380**
友人の存在感	有意確率(両側)	.826	.847	.000
	N	119	119	119
【意・他3】相談相手、モデ	Pearson の相関係数	.352**	.518**	.066
ルとしての大人の存在感	有意確率(両側)	.000	.000	.475
	N	119	119	119
【意・他4】叱ってくれる他	Pearson の相関係数	.262**	.042	.221*
者の存在感	有意確率(両側)	.004	.653	.015
	N	119	119	119

^{**.} 相関係数は 1% 水準で有意(両側)です。

^{*} 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)です。

の存在感」r=.454(p<.001),「かかわりの強い友人の存在感」r=.380(p<.001),「叱ってくれる他者の存在感」r=.221(p<.05)の3項目と相関があるが低い。先ほどの2つのCAMI_Totalで相関のあった「頼りやすい大人の存在感」とは有意な相関が見られなかったのが興味深い。この結果から、かかわりの強い大人と友人に囲まれて、叱ってくれる他者の援助によって自分を律しながら、自立し、自ら歩んでいくような力強い生徒像が浮かび上がる。これこそ「生きる力」を身につけた生徒だろうか。

3.2. 因果関係 (重回帰分析)

意味ある他者が、CAMI_Total と相関関係があることはわかったが、意味ある他者が CAMI_Total にどのような影響を与えているかという、因果関係は明らかになっていない。そこで、ここに因果関係を明らかにするために重回帰分析を行う。従属変数として、CAMI_Total の各因子得点をおき、独立変数として意味ある他者の4つの因子得点をおいて、強制投入法による重回帰分析を行った結果が以下である。

このように、「努力の保有感と他者の援助の保

表 12 CAMI-Total「運の保有感」と意味ある他者因子得点

従属変数: CAMI_total_IVM 「運の保有感」	
独立変数	標準偏回帰係数
【意・他1】かかわりの強い大人の存在感	009 n.s.
【意・他2】かかわりの強い友人の存在感	026 n.s.
【意・他3】頼りやすい大人の存在感	.331 ***
【意・他4】叱ってくれる他者の存在感	.230 **

^{***}p<.001, **p<.05, $R^2=.148***$

表 13 CAMI-Total「達成への統制感と能力の保有感」と意味ある他者因子得点

従属変数: CAMI_total_2VM 「達成への統制感」と「能 独立変数	カの保有感」 標準偏回帰係数
【意・他1】かかわりの強い大人の存在感	.279 ***
【意・他2】かかわりの強い友人の存在感	003 n.s.
【意・他3】頼りやすい大人の存在感	.473 ***
【意・他4】叱ってくれる他者の存在感	019 n.s.

 $^{***}p<.001, **p<.01, *p<.05, R^2=.320***$

表 14 CAMI-Total「努力の保有感と他者の援助の保有感」と意味ある他者因子得点

従属変数: CAMI_total_3VM 「努力の保有感」と「他者	旨の援助の保有感」
独立変数	標準偏回帰係数
【意・他1】かかわりの強い大人の存在感	.426 ***
【意・他2】かかわりの強い友人の存在感	.347 ***
【意・他3】頼りやすい大人の存在感	026 n.s.
【意・他4】叱ってくれる他者の存在感	.195 *

^{***}p<.001, **p<.01, *p<.05, $R^2=.344***$

有感」は、依存的な対象としての他者からの影響は受けずに、かかわりの強い大人や友人、また、 叱ってくれる他者の助けをかりて努力できるとい える。かかわりの強い大人や友人が、努力の大き な支えになっている。 この結果をパス図にしたのが図 1である。

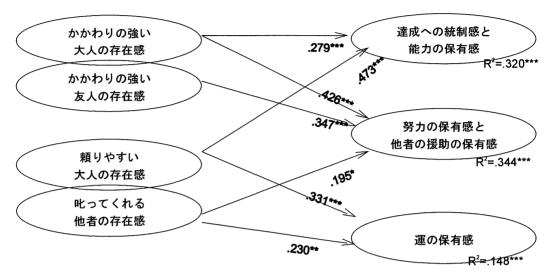


図 1 意味ある他者と CAMI-Total の関係

4. 意味ある他者の因子得点と学力の関係

最後に、意味ある他者の存在感と、学力がどう 関係しているのか調べる。そのために、従属変数 として達成度テスト合計点の偏差値を用い、独立 変数として、先ほどの意味ある他者の4つの因子 得点を用いる。強制投入法で重回帰分析した結果 が、表 15 である。またこれをパス図にしたのが、 図 2 である。

表 15 意味ある他者因子得点と学力

従属変数: 合計点(達成度テスト)偏差値	-
独立変数	標準偏回帰係数
【意・他1】かかわりの強い大人の存在感	.299 **
【意・他2】かかわりの強い友人の存在感	.057 n.s.
【意・他3】頼りやすい大人の存在感	291 **
【意・他4】叱ってくれる他者の存在感	.153 †

p<.001, **p<.01, *p<.05, †p<.1, $R^2=.145$

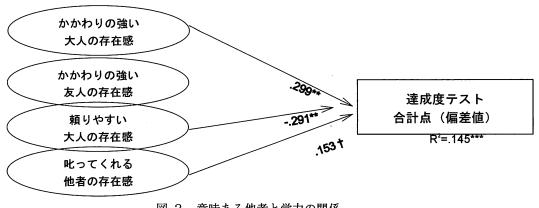


図 2 意味ある他者と学力の関係

このように、友人関係は学力への影響が有意ではなく、かかわりの強い大人が大きな影響を与え、依存対象としての大人はマイナスの影響を与えていることがわかる。叱ってくれる他者は、わずかだが、プラスの影響を与えている。

このことは、意味ある他者の存在が、学力へも 影響しており、学力の向上を目指すにはかかわり の強い大人の存在感を上げることが比較的有効な 手段の1つであることをいっている。

5. 本研究のまとめ

研究1として、「意味ある他者」の調査から因 子分析をした結果、第1因子として「かかわりの 強い大人の存在感」があらわれ、第2因子として 「かかわりの強い友人の存在感」, 第3因子は「頼 りやすい大人の存在感」, 第4因子に「叱ってく れる他者の存在感」があらわれた。「かかわりの 強い大人の存在感」が高い生徒は、より長い時間 家庭学習しており、将来の夢も持っている。この 意味ある他者の存在感が、研究(特)の CAMI にど のような影響を与えているかを検討するため、重 回帰分析を行った。その結果、「運の保有感」は、「頼 りやすい大人 | と「叱ってくれる他者 | から正の 影響を受け、「達成への統制感と能力の保有感」は、 「かかわりの強い大人」と「頼りやすい大人」か ら正の影響を受け、「努力と他者の援助の保有感」 は「かかわりの強い大人」と「かかわりの強い友 人」と「叱ってくれる他者」から正の影響を受け

ている。このように、「努力」を支えているのは、 依存的な大人ではなく、かかわってくれる人間た ちということになる。さらに、学力との関連も調 べると、「かかわりの強い大人」と「叱ってくれ る他者」の存在感は正の影響を与えているが、「頼 りやすい大人」は負の影響を与えていた。

まとめると、生徒を取り囲む他者の中でも、生徒本人にとってすぐ頼ってしまうような甘えの対象や、叱られて仕方なく行動をとらされるような威圧的な対象に囲まれていては、運まかせの生徒を育てていることになりやすい。やはり生徒の「自律」や「自立」を促すようなかかわり方をしてくれる他者に囲まれる生徒は、「努力できる」と認識していることがわかった。これは、他者とのかかわりを通して、自分の外の世界に能動的にアプローチし、自我を確立するという、ミードの社会的自我論に裏付けられる結果となった。

研究2では、キャリア発達をCMAS4を用いて測り、「努力」「他者の援助」の保有感との相関関係を調べると、各項目で有意な相関関係があらわれた。他の有意なものはマイナスの相関であった。その後の重回帰分析においても、キャリア発達は、「努力」「他者の援助」で支えられていることが示された。

このように、ニート人口の割合が日本一という 不名誉なレッテルを貼られた名護市だが、中学生 たちはその後を確実に追おうとしていることがわ かった。なぜなら、大半が物事を「運」や「能力」 で説明しようとし、その考え方が、「生きる力」 の足を引っ張り、「学力」の足を引っ張り、「キャリア発達」の足を引っ張っているからだ。

しかし、中には、力強く「努力」し自ら「行動」できる中学生もいることもわかった。このタイプの中学生は、かかわりの強い大人に支えられ、援助を受けながら努力し行動している。将来の夢を持ち、生活習慣も親にきちんと支えられしっかりしている。キャリア発達が促され、学力も高い。これらの生徒のがんばりを我々教師側も、バンデュラ(Bandura,1977)の「効力期待」を向上させてくれるものとして受け止め、自己効力感を上げ、自信を持って1人1人の生徒に根気強くかかわり続けることが大切だと感じた。

まとめると、かかわりの強い他者に囲まれ、援 助を受けながら、努力し行動できる生徒は、「生 きる力 | を育み、「学力 | をつけ、望ましい「キ ャリア発達」をしているといえ、研究仮説が正し いことが確認された。ただし、名護市の中学生の 場合、「運」や「能力」で、成功の可否を説明し ようとする考え方が多く、この考え方が「学力」 や「キャリア発達」の足を引っ張っている。この ままでは、ニート率日本一という汚名を返上する ことは難しい。学校現場はじめ、家庭、地域にお いても、かかわりの強い大人たちが今まで以上に かかわり続け、本人たちに「自ら取り組んだ」と いう経験をさせること、その経験を根拠にさらな る「自ら取り組んだ」という経験をさせること、 このような地道な取り組みの繰り返しがバンデュ ラ(Bandura.1977)の自己効力感を上げていくも のだということを、まわりの大人たちが意識し直 すことが大切なように思われる。依存的な大人に なるのではなく、威圧的な大人になるのでもなく、 あくまでも「生徒の自立、自律を願って」のかか わりを積極的に続けることが大切であることを示 唆している。

沖縄の方言に「なんくるないさ」というものがある。これは『なんとかなる』に近い意味でよく用いられる。例えば、他人がいよいよ大舞台に立つ直前の場面で、「なんくるないさ」と声をかける。これは本来は『大丈夫。今まで頑張ってきたんだから、なんとかなる。気楽にやりなさい』という、英語で言えば『Take it easy』に似た使われ方をする。ところが、『別にたいしたことない。

あまり努力しなくてもなんとかなるさ』というような誤った用いられ方もよく聞く。この「なんくるないさ」の考え方を、まず「人事を尽くして天命を待つ」に似た「なんくるないさ」の考え方にしっかり改めてゆくことの大切さを本研究は示唆している。精一杯努力して行動し、生徒とかかわり続け、地道に積み重ねて行くべきだと言えよう。すぐには結果は出ないとは思うが、行動し続けることがいつか未来を拓いてくれると信じる教育こそが中学生の生きる力とキャリア発達に強くつながるとまとめることができる。

【引用文献】

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavior change. Psychological Review. 84.191-215
- 千葉康成, 島袋恒男 2009 中学生の生きる力の心理 学的検討 I - CAMI 理論を中心として一琉球大学 教育学部紀要 75,pp.163-182.
- 船津衛(2000)ジョージ・H・ミード 社会的自我論の 展開 - 東信堂 pp.5-6
- 廣瀬等, 島袋恒男, 井上厚(1996)沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟態度との関連 琉球大学教育学部紀要 49,pp.201-211
- 三村隆男 (2006) キャリア教育と道徳教育で学校を変える! 実業之日本社 pp.8-14
- 文部科学省(2004)キャリア教育の推進に関する総合 的調査研究協力者会議報告書
- 文部科学省(2007.11) 平成 18 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/11/ 07110710/001/005.pdf
- 坂柳恒夫, 竹内登規夫 (1986) 進路成熟態度尺度 (CMAS-4) の信頼性および妥当性の検討 愛知教 育大学研究報告,35 (教育科学編),pp.169-182
- 島袋恒男, 井上厚, 廣瀬等 (1996) 沖縄県の児童・生 徒の学習統制感と原因帰属に関する発達的研究 (1) 琉球大学教育学部紀要 48, pp.387-404
- 廣瀬等, 島袋恒男, 井上厚(1996)沖縄県の児童・生徒の将来の職業選択と進路成熟態度との関連 琉球大学教育学部紀要 49.pp.201-211